

# 世界

## 特集 金権に支えられた反動化

第 448 号  
1983 年 3 月

中曾根政権の位置と本質  
現状打破の政治論  
金大中氏出国と日韓米同盟  
田中角栄と政治新幹線  
電波行政-田中政治の源  
利益配分システムは変化したか  
内務官僚の復権  
レーガノミクス小景  
80年代のヨーロッパと軍縮  
戦中思想再考  
エゴン・シーレの閃光の生涯

山口 定  
内山秀夫  
和田春樹  
落合・肥野  
茶本繁正  
広瀬道貞  
萩原道彦  
氏家 尚  
A・ミルダール  
鶴見俊輔  
坂崎乙郎

E・H・カーとロシア革命 溪内 謙

岩波書店

# 3

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別扱承認雑誌第三八九号  
昭和五十八年三月二十八日運輸省特別扱承認雑誌第三八九号  
昭和五十八年三月二十八日発行(毎月一回一日発行)

世界

特集 金権に支えられた反動化

一九八三年

三月号

昭和二十四年三月二十八日運輸省特別扱承認雑誌第三八九号  
昭和五十八年三月二十八日発行(毎月一回一日発行)

世界 第四四八号

一九八三年三月

定価 五八〇円(送料別)

©岩波書店 1983年 本誌掲載の記事は無断転載をお断りします 編集・発行者 安江良介 印刷所 東京都板橋区志村1-11-1 凸版印刷株式会社 発行所 東京都千代田区一ツ橋2-5-5 株式会社 岩波書店 振替東京6-26240番

昭和8年 サタ サタ サクラ ガ サタ



優良至廉の國産品

製社櫻六  
X-RAY FILM

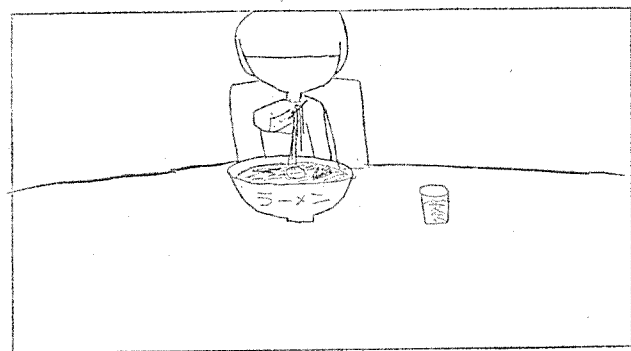


国産初のレントゲンフィルム発売50年。創造の歴史をバネに、映像の未来へ。  
いわゆる「サクラ読本」が教科書に制定された昭和8年。小西六から国産初の本格的なレントゲンフィルムが発売されました。以来50年、放射線診断の眼りない進歩に対応した感光材料と機器類を提供し、日本の医療に貢献してまいりました。各種フィルム、カメラ、電子複写機、オーディオ・ビデオテープ……常に先駆の製品を生み出す総合映像情報の小西六。今後も、価値を歴史が証明する真にすぐれた製品を開発してまいります。

sakura Konica u-Bix magnax 小西六写真工業株式会社  
100 東京都板橋区西新保1-20-2 新保野村ビル  
TEL. 03(3)348 0111(大代)

## ひとりで食べる子どもたち

—「子どもたちの食卓」取材して—

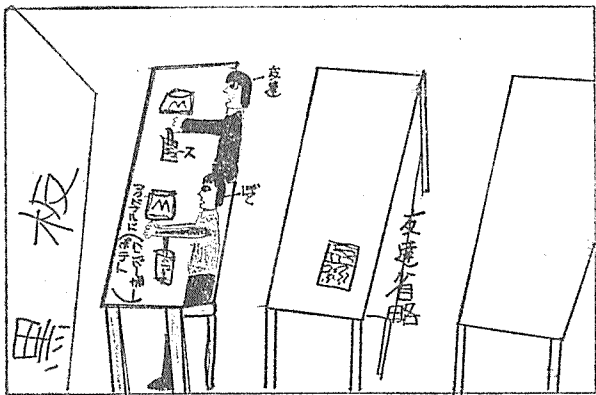


### 宮崎 経 生

#### ▼ ひとりの食事 ▲

広いテーブルの上に無雑作に投げ出されたひと切れのパン……。この絵は東京世田谷区の小学校五年生が描いたある朝の食卓の風景である。ひとりでラーメンをすすむ女の子の絵……。福岡市に住むこの子は、自分で作ったインスタントラーメンで、ひとりきりの朝食をとり、登校した。彼女は夕食もひとりですませた。どちらの絵も、両親のいる、子どもたちの奇妙な食卓の自画像である。

この数年、朝礼で倒れたり、不眠、だるさ、頭痛など身体の異常を訴える子どもが目立ち、各方面を心配させている。一体彼らの生活のなにが原因なのだろうか。NHKの「おはよう広場」では、子どもたちの心身の異常を食事からアプローチしようと、五十六年九月以来一年間にわたって、小学五、六年生を対象に、食生活の調査を実施した。この調査は、何を食べたかというだけでなく、誰と、どのように食べたのか、その時の心理はどうだったのか、健康状態はどうか、をたずね、それらの関連を探ることに重点を置いた新しい形の総合調査として意図された。方法として女子栄養大学の足立己幸教授の協力を得て、「食卓を絵に描いて貰う」というスタイ



夕食、男子——「ハンバーガー、ポテト、ジュース」

と答えた子の多さに驚いた。実際、この村のこともたちは、朝夕の食卓においての大人不在の割合が、調査した全地域の中でずばぬけて多く、しかも、十人に一人は「夕食をとらない」と答えている。一体これはどうしたことなのか。私たちは、昨年十月、調査票を手に、村のこともたちを訪ねた。

岩手県北部、三陸海岸に面したこの村は、

ルも導入した。

全国、岩手、茨城、東京、大阪、福岡など二千名を対象としたこの調査は、意外な事実を浮き彫りにして私たちを驚かせ、私たちはそれを「こともたちの食卓」と題するNHK特集として放映した。

その調査結果は、つぎのような点特徴的だった。

○ 朝食については、四割近いこともたちが、ひとりぼっちで食事をする自分の姿を描いた。

○ 一割のこともは朝も晩も大人不在の食卓についていた。

○ 三割以上のこともが、食べ盛りにもかかわらず食事が「楽しくない」と、答えている。

これは、めざましく豊かになった日本の食料事情と栄養状態の裏側で、ひとつの逆行現象が家庭の食卓に進行しつつあることを示唆している。一体、何故こともたちはひとり、食べるのか。その時、親は何をしているのだろうか。こうした食事をしている家族の「食卓感」はどういうものであろうか。私たちは、絵とテータを手がかりに、ひとりぼっちで食事することもたちの姿を追ってみた。

そしてその姿の後ろにはのを見えてくる、いまの「家族」のあり方をとらえたいと思った。

#### ▼ 塾の休み時間に

東京代々木にある進学塾。夕方五時になると小学生たちが手に手に弁当を下げながら集まって来る。彼らは九時までの四時間、国語、算数、理科、社会の四科目の特訓を受ける。めざすのは、麻布、開成、武蔵などのいわゆる有名私立中学である。

彼らの夕食は、一時間目と二時間目の休み時間、僅か十分足らずの間にあわただしくまされる。その間に食べ切れなかったら、残りは次の休み時間に食べることになる。残さないよう、落ちて来る眼鏡を箸で押し上げては、必死に弁当をかきこむ。多くは、塾の傍で買って来たハンバーガーや弁当である。コーラで飲み下している者もいる。

帰宅時、また腹を減らしたこともたちは、来がけに寄ったハンバーガースタンドに再び立ち寄って空腹感を満たし、夜の駅の改札口へ消えてゆく。こうした生活を彼らは週三日続ける。さらに毎週日曜日には早朝から模擬テストを受けねばならない。

この塾に通う一人の少年。彼の家族は、彼が四年生の時、父の転勤で群馬県前橋市に移

った。だが、進学を控えている彼は祖母と二人東京に残り、塾に通うことになった。二年後、両親と妹が戻り、今度は妹も塾通いとなった。アルバイト勤務の父は帰宅が連日、九時十時になる。この少年が家族揃って夕食をとることは無い。彼は言う。

「時々、急に寂しくなる。寂しいと思うと勉強が手につかなくなつて、ぼーっとしている。今は妹と話すのは、平日の朝の僅かな時間だけしかない。なんだか家族が離れてゆくような感じがする……」

両親に会って話を聞いた。「受験生なんだから仕方がない」という答えが返ってきた。当然そうなのだが気がかかった。父親も母親も、できあいのサケ弁当を食べていた彼の姿を知らない。初めて会った私たちに、寂しさをもらしたことも、もちろん知らない。

#### ▼ 夕食は食べない

朝、蠅帳の乗った広いテーブルで、男の子がひとりご飯に味噌汁、卵焼きを食べている。この子は、夕食を食べなかったと答えた。岩手県九戸郡のある村のこともたちが描いた絵のうちの一枚である。

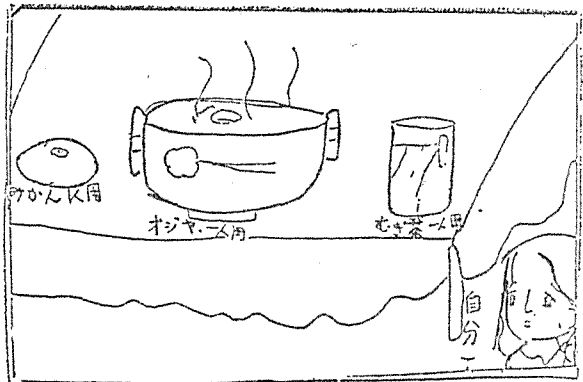
この村のこともたちの調査票を一枚一枚めくって見て、「ひとり」とか「食べなかった」と答えた。しかし、村の中を歩きながら、私はある当な事情ですから、仕方ありませんね」と答えるのだった。

しかし、村の中を歩きながら、私はある当惑を感じざるをえなかった。「出稼ぎの村」という言葉から私が連想していたものと、実際の村の様子が大分異なっていたせいかもしれない。

私たちが最初に訪ねた少年の家は、建て替えたばかり、農家ならではの広い敷地を利用したモダンな建物であった。勝手口には、ポイラーが据え付けられ、台所・洗面所・風呂場に給湯している。台所には湯、水道、井戸水の三つのじゃ口が並び、大型の冷凍冷蔵庫の他に、四百リットルあまりの冷凍専用庫が備えられていた。車は複数あるため、出稼ぎにも自家用車でゆく。

夕暮れて帰宅した老人に聞くと、このころ冷害続きで暮しは楽ではないが、田畑だけでやれないわけではない。ただ、家を建て替えた借金の返済と生活の余裕のために、現金収入が欲しい。村にも男の仕事が無いわけではないが実入りが少ないのでみな東京に出ること。村にニット工場ができて女にはたいそう人気があることなどを話してくれた。

絵をもとに何軒かのこともたちを訪ねたが答は同じだった。村にひとつある小学校の校長を訪ねると、彼は、村の男たちは大工として東京方面に出稼ぎに出るのが伝統的であること、その数は生徒の家庭の約半数に昇ること、そして、十年前に村にニット工場が出来て以来、母親たちが現金収入を求めて勤め出したことを話してくれた。私たちが、夕食の欠食が多いことをつげると、「はあ、困ったも



夕食、女子——「みかん一人用、オシヤ-ス月、むぎ茶一人用」

分の好きな物ばっかし」

と答える。彼女は、自分の言うことは全く聞き入れない息子に困り果てた様子だった。

この村では数年前まで家の建て替えブームが続いた。狭い地域社会で人々は出稼ぎ収入を投入して争って家を建てた。この地方から出稼ぎに出る人々は「気仙大工」と呼ばれ、その高い技術に高収入が支払われる。出稼ぎの伝統と、働かない女は農家の嫁でないという意識も手伝って、村の大人は家を空ける。そして、その立派な家の中で、子どもたちは一人で食卓に向っている。

▼ 親は家にいた ▲

ひとりぼっちの食事——しかしそれは、親の長労働時間や共働きの増加、そして進学競争など、物理的な親の不在だけが原因ではない。

子どもが一人で食事をしている時、親はどこにいたか」を調査してみると、もうひとつの意外な事実が現われてきた。

その時、多くの親は家に居るのである。朝食時、母親九一%、父親五一%、夕食時、それぞれ七七%、二五%が家にいる。では、親、とくに母親は何をしていたのだろうか。子どもたちが調査票に書き入れた言葉を引用して

見よう。

○お母さんは、食事を作ってくれたあとテレビの前で新聞を読んでいた。(朝食・女子)

○お父さんは外で水まき、お母さんは寝ていた。お兄さんはふる。(朝食・男子)

○母、ぐうぐう。おばあさん、ぐうぐう。父、テレビ。お兄ちゃんおねえちゃんは学校。(朝食・男子)

○母は、たばこをすいながらよこになってテレビを見ていた。(夕食・男子)

○母は、となりの部屋でビールをのんでいた。(夕食・女子)

これらを整理すると、一番多いのは台所仕事、続いて洗濯、寝ていた、となる。ことも近くにいて、一緒に食事をしようと思えば、できる筈なのにならぬのはなぜなのか。

この事実は、親の食事意識に何かしらの問題があるのではないかとという新たな疑問を生んだ。私たちは、母親に会って話を聞くことにした。

都内のある団地に住む女の子は、朝も夕もひとりで食事をした。調査票には、「母親は朝食の時隣の部屋で新聞を読んでいた」と

書いていた。きびきびと動くその母親に聞いた話をまとめるところである。

こどもの食事のスピードが遅いため傍にいらすといらす。それで、娘の食事が終わるまで隣の部屋で新聞を読んでいる。自分の朝食は、娘の登校後テレビを見ながらゆっくりする。結局、母娘がそれぞれひとりで食事をする方がお互い気楽に食事ができるのだ。それに娘がひとりで食事をするといつても、自分は娘から見えない所にいるのだから、一緒に同然なのではないのか、と。

また、別の母親はこんな話をしてくれた。

その息子は、調査当日の朝食はひとり、前日の夕食もひとりだった。しかも夜は外食と答えていた。母親は絵を描くことが好きで夜が遅くなるため起床は遅い。このことについて

その母親の意見は、「家族といってもそれぞれの生活があり、それを大事にしたいし、小学校も六年生になったら親離れ子離れも必要だと思っし、ひとりでの食事はその訓練になる。それに食事を共にしなくても別の面で家族のコミュニケーションは工夫している」ということだった。

▼ うつ病傾向 ▲

の結果、ワースト・ファイブは、風邪をひき易い、だるくなり易い、夜よく眠れない、頭痛が痛み易い、足が重い感じがする、で、いずれも、三人から五人に一人がどれかに該当している。風邪はともかくとしても、こどもが、だるさ、不眠、頭痛を訴えるのはどういふことなのか、もちろん、対象児がこれらの症状を的確に把握して答えたのかどうかについては疑問が残る。だが、こどもたちが、身体の不調をこうした表現を借りて訴えたことは事実である。

では、こうした食生活は子供の健康とどのように関連しているだろうか。私たちは、成人病のチェックなどに使われる十四項目の症状アンケートを子供たちに実施してみた。そ

これら十四項目の症状が四個以上重なること、健康上に何らかの問題があることが心配される。データを再解析したところ、四個以上保有している割合は一人で食事をしたこどもが、家族揃ったこどもに比べて、一・八倍

# 日本の経済発展と金融

## 寺西重郎著

・一橋大学経済研究叢書 / 別冊

明治期における銀行の成立と貨幣制度の確立過程を概観し、両大戦間期の銀行業の集中過程、さらに、戦後の金融再編と高度成長期以後の金融メカニズムを明らかにする。経済発展と貨幣現象との関連を解明し、歴史過程を前提とした金融政策の総合的な構造把握を企図した本書は新たな金融理論の土台を構築する意欲的な大著である。A5判・六七四頁 / 定価八七〇〇円



岩波書店

東京・千代田・一ツ橋

という結果が出た。

森崇氏（福岡教育大学教授・思春期心身医学）は、風邪を除いた諸症状がうつ病的傾向を示すもので、これはこれらの子どもたちが愛情の充足感を感じていないのではないかと心配する。森氏は、子どもが親の愛情の確保す大きな手段として食欲の充足があるが、その充足とは、食事で満腹することではなく、食事に満足することによって初めて生じると指摘している。食事の仕度はされているが、家族のいない食卓でも満足感を感じないことは十分に想像される。

森氏の研究先の若杉病院（福岡県粕屋町）には、特別に思春期病棟が設けられ、神経性下痢、うつ病、拒食症など思春期心身症に悩む若者たちが全国から集まって来る。彼らと会って話を聞いたところ、十三人のうち四人は、家庭の食卓で物理的あるいは精神的に孤独だった苦い思い出を話してくれた。

私には、これらの若者たちの家庭が特異な環境だったとは思えない。むしろ取材した一人ぼっちの、小学生たちの状況に共通しているように思えた。

世田谷区で会った少年の話を最後に紹介しよう。彼は両親と三人暮らし。事務所を経営す

る父親は仕事に追われて帰宅は連日深夜、朝は出勤ぎりぎりまで寝ている。母親は彼の登校後に食事をする。彼が朝食を家族と揃って食事をとることは週のうち一度も無いし、夕食は、日曜日の一回だけである。

「……ずうっとそんな生活が続いているからもう何も感じない。一緒に食べてると頼んだこともあるけれど、そんな話をすると父が怒る。『お母さんは忙しいんだから……』」

——悩みや相談はいつするの？

「相談はしません。いつも一緒にいないから何となく信じられない……。悩みがあるときには、一人でベッドに入って横になってぼうっとしている……」

彼が、調査票に書き入れた親への願いは、「いっしょに、両親ともどもいっしょに食べてほしい」という切々としたものだった。

私たちは、この男の子の声を放送したいと思ひ、母親へ、了解を求める電話を入れた。

受話器の向うから返って来た答えは、「あの子は無口で私たちに殆ど話をしない。彼の話聞くよい機会だから、テレビを見る」というものだった。母親の話し方は優しくいいのだが、やはり寂しそうだ。

#### ▼ 黙々と…… ▲

一人で食事をする子供たちの絵と言葉をもとに私たちは、数多くの家族に会って来たが、そこから現われて来たのは、広くてしらちゃけたダイニングテーブルと、そこを家族の一人一人が時間を置いて黙々と通過してゆく風景であった。家族は、それぞれの生活時間に従ってテーブルに向うのだが、その顔はどれも楽しそうに見えない。そうした光景に私は、ふと、家族の「孤立化現象」とでもいうべきことが起きつつあるのではないかと想像してしまう。

一体、何故こうなってしまったのだろうか。足立己幸氏は、その背景として、現代日本人の「貧困な食事観」を指摘する。「日常茶飯時」という言葉の通り、毎日のことなのだから食事は後まわしでいいという感覚が、子供に伝わって来ている。

私は足立氏の「貧困な食事観」を「家族観」という言葉に置き変えてみたいと思う。取材をしてきた私たち自身、家族について深く考えてきたことがあっただろうか。そう考えてきた時に、子供たちの絵と言葉が、改めて、私たちの胸をつき刺すのを感じた。

（みやざき・つねお NHKディレクター）